

平成29年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成 30 年 3 月 5 日

報告者	学科名	保健福祉学科	職名	准教授	氏名	竹本 与志人
研究課題	医療ソーシャルワーカーを対象としたアセスメント実践に関する研究					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	竹本 与志人	保健福祉学科 准教授	医療福祉	研究計画立案ならびに 実施に関する全般	
	分担者	倉本 亜優未	保健福祉学研究科 保健福祉学専攻 院生	医療福祉	研究計画立案ならびに 実施に関する研究協力等	
	分担者	仲井 達哉	川崎医療福祉大学 助教	医療福祉	研究計画立案ならびに 実施に関する研究協力等	
研究実績 の概要	<p>本研究は、医療ソーシャルワーカーの養成・現任研修を意図とした教育活動における課題および援助実践能力の向上を目指した指針を明示することをねらいとし、医療ソーシャルワーカーのアセスメント実践の中でも、とりわけ退院援助における家族評価に焦点を当て、その実践状況を類型化するとともに関連要因を明らかにすることを目的とした。</p> <p>近畿、中国および中部地方の8府県にある医療機関に勤務する医療ソーシャルワーカー844人（平成29年4月末時点）を対象とし、質問紙調査を実施した。その結果、259人（回収率：30.6%）から回答が得られ、統計解析には回収された調査票のうち、各調査項目に欠損値を有さない資料を用いた。分析結果は次のとおりであった。</p> <p>1. 回答者の分類およびその関連要因の検討</p> <p>◇各回答傾向を基に回答者を分類した結果、3クラスターが得られ、クラスター1は【家族評価中頻度実践型】、クラスター2は【家族評価低頻度実践型】、クラスター3は【家族評価高頻度実践型】という特徴を有すると考えられた。</p> <p>◇退院援助における家族評価を複眼的視点のもと実践していると考えられるクラスター3に所属する割合は3割にとどまっていた。</p> <p>◇家族評価における実践頻度が最も低いクラスター2に所属する者は全体の14.2%であり、これらの者に対し何らかの策を講じる必要性が考えられた。</p> <p>◇クラスター3がクラスター1およびクラスター2に比して、①女性の占める割合、②認定社会福祉士（医療分野）を所持する者の割合、③日本医療社会福祉協会に入会している割合、④『家族のアセスメント』に関する教育や研修を「複数回受講した」または「一度受講した」割合が、それぞれ有意に高いことが明らかになった。</p>					

※ 次ページに続く

<p>研究実績 の概要</p>	<p>◇各アセスメント内容における実践頻度の高いクラスター3は最も低いクラスター2に比し、①年齢が高く、②医療ソーシャルワーカーとしての通算経験年数が長いことが統計学的な有意差のもと確認された。</p> <p>◇クラスター2に関しては、クラスター1およびクラスター3より療養病棟を担当する者の占める割合が有意に多いという結果であった。</p> <p>2. 退院援助における家族評価項目の分類およびその特徴</p> <p>◇78項目から成る退院援助における家族評価項目をその実践頻度の高低で分類した結果、3クラスターに分類された。実践頻度が高い項目は、44項目（56.4%）であり、中程度の実践頻度である項目は25項目（32.0%）、実践頻度の低い項目は9項目（11.5%）であった。</p> <p>◇これらの項目を概観すると、家族成員における現状の理解（患者の病状、退院後必要なケアなど）および患者の退院のために活用可能な家族の資源の程度といった項目は実践頻度が高い傾向にあった。その一方で、患者の退院に向けた患者を含む家族成員間の役割調整等に関する項目は実践頻度が低い傾向にあるという特徴が明らかになった。</p> <p>※本研究の成果は OPU フォーラム 2018 で発表する予定である。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>調査研究報告書</p> <p>* 医療ソーシャルワーカーを対象としたアセスメント実践に関する研究 調査研究報告書 2018年3月 研究代表者 竹本 与志人（岡山県立大学 保健福祉学部）</p>